



東京YMCA

2014 1・2月号

発行所 公益財団法人東京YMCA 135-0016 東京都江東区東陽2-2-20
発行人 廣田光司 電話 03-3615-5562

URL <http://tokyo.ymca.or.jp>

東京YMCAの使命

東京YMCAは、イエス・キリストによって示された愛と奉仕の精神にもとづいて、青少年の精神、知性、身体の全人的成長を願い、地域社会に奉仕し、公正で平和な世界をつくるための運動を展開する。

変革を見据えて

むしろ心を新たに自分を变えていただき、何が神の御心であるか、何が善いことで、神に喜ばれ、また完全なことであるかをわきまえるようになりなさい。
「ローマの信徒への手紙」12章2節



(写真右) 福島の子どもたちを招待する「リフレッシュキャンプ」は企業からの協賛を得て、通算42回実施、延べ1600人以上が参加した。写真は三菱商事(株)社員ボランティア皆さんと子どもたち。YMCA妙高高原ロッジで。

(写真左) 小学生対象「菅平チャレンジスキー」。今冬もまた、幼児から高校生まで約1000人が各地のキャンプやスクールに参加。リーダーや仲間たちと共にスキーや雪遊びを満喫した。



世界のYMCAと交流して



公益財団法人東京YMCA
評議員会会長
勝田 正佳

とのです。

昨年晩秋、北京を訪れて東京・北京YMCAパートナースhip 20周年記念を共に祝いました。これまで協力が、人との関係の強さ、温かさを再確認することができましたし、またパートナースhip更新の申し入れがあったことは喜びでした。

地政学上、日本、中国、韓国は近隣国としてつき合っていくしかない国です。近隣ゆえに生じる摩擦もありますが、国と国との関係は一面的ではありません。政治、経済、文化など、具

若者を育むために

会員の皆様の熱い思いと

神様の導きによって、2014年の新しい年を迎えられ、さきさまな若者を育てる機会を感謝いたします。YMCAは、たくましい子どもたち、家族の強い絆、支えあう地域社会を築きます。

東京YMCAは、山中湖センター、妙高高原ロッジ、野尻キャンプという三つの野外教育施設を運営しています。中でも歴史がある山中湖センターが昨年90周年を迎え、多くの皆様が志を寄せていただき、施設改修をいたしました。キャンプ場はこれまで多くの若者が育んできました。YMCAの中心的な願いであるユース育成の大切なチャリティーランでは全



公益財団法人東京YMCA
総主事・代表理事
廣田 光司

国の障がいのある子どもたちの支援をしました。また新規事業として通信制高校のサポート校「東京YMCA高等学院」も準備がすすんでいます。YMCAは、早くも入学生が誕生しています。若者がこれからの社会を創造・変革していくことは言うまでもありません。その後押しを、市民社会を形成するシニア世代が応援してゆく「よい循環」がYMCAを中心に生み出されていくことを祈ります。東京YMCAを結成する公益財団法人、学校法人、YMサピスは、時代のニーズに応え、それぞれの役割分担をして、明日の社会を担うユースにアプローチしていきたいと思っています。

時代のニーズに応える



学校法人東京YMCA学院
理事長
徳久 俊彦

ワイスメンズクラブの支援を得て、それぞれの得意技を用いて災害支援に力を尽くしました。これは、時代のニーズに添えて働くYMCAの大事な働きだと思

明けて、おめでとうございます。

東日本大震災の復興も進まぬ中、昨年は西日本の集

認定準備を進めることで、この「職業実践専門課程」の認定を受けること

昭和12年、日本は支那事変を機に、中国への侵入を開始しました。16年にはハルイを攻撃し太平洋戦争に突入。私は昭和18年、同志社大学3年生の時、学徒出陣で大阪の野砲部隊に入隊しました。馬で野砲を引く隊でしたから、馬を少しでも傷つけると「お前たちは一銭五厘のハガキ一枚でいつでも召集できるが、馬はそうはいかない」とこっぴどく殴られました。戦時中の日本は、私が今ここに書いても、経験したことのない人には到底理解されない国家でした。神州不滅の国だという妄想を国民に植付け、天皇を神として崇拝し、軍国主義を徹底しました。治安維持法が制定され、国の方針に逆らう者は特高警察に捕われ、牢獄に入れられました。何十人もの牧師が捕われ、獄死されました。戦争中の日本は、その例を見ることのできない程、国民の自由、人権が全く無視された国家でした。今日の日本は、秘密保護法案が強引に可決され、国民の知る権利が侵され、秘密を漏らした者は秘密漏洩罪に問われるという、戦前の治安維持法を思わせる方向に進んでいます。まさに民主主義の危機といわざるを得ません。さらに平和憲法の解釈を曲げようとする動きもあります。この憲法は、国内外の多大なる犠牲への反省から作られたものです。私たちは二度と過ちを繰り返さぬよう、この平和憲法を守らなければなりません。(名誉会員 富田針次)

講演会 「自立とその支援を問い直す」

居場所と街づくりこそ必要

「『自立』とその支援を問い直す」をテーマとした全4回の連続講演会が、11月23日から始まった。主催は東京YMCAオーパンスペースliby（リビー）で、東京YMCA高等学校の開校記念も兼ねての開催である。また1・2回目は新宿区勤労者仕事支援センターから助成を受けた。第1回目は、新宿区内で路上生活者支援などを行っている「スーブの会」代表の後藤浩二さんに「貧困と自立」について講演いただいた。

後藤さんは自立という言葉を使わない。この日も居場所づくり、街づくりという言葉を避けながら、ご自身の経験を通じて、支援者であるとはどういうことか

を語られた。人口流動の激しい新宿という街では特に、路上では人はなかなか交わることがない。路上生活者には、そこに至るまでのさまざまな個別の事情があるのだが、彼らがそれを誰かに語ることはないし、また彼らに声を掛ける人もいない。そのため個々の問題は知られないまま、すべて「ホームレス」という言葉で括られていく。

私たちは徹底的に自己責任、自業自得と考える文化に染められているため、お互いに歩み寄ることができない。働かざるもの食うべからずである。路上生活者自身もまた、SOSをとりの市民として、同じ生

活者として声をかけ、一人の個人として話すとき、路上の人にも変化が現れる。後藤さんはその後、多様な生活者の集まれる場を作り、地域住民がホームレス状態の人と出会う場を作った。街の中に、ホームレス状態の人が語れる場を作った。逆

に、当事者を苦しめてしまつこともある。かつて後藤さんが「支援」を勧めた方も、生活保護を受けたいと言って援助を拒み続けたまま亡くなつてしまつた。声をかけられる度に、自己責任ということが強く響いていたのではないかと、後藤さんは振り返る。誰にだってプライドがある。仕事さえ貰えればここから、抜け出して行けるんだという自尊心を失つては生きていけない。しかしわたしたちが、ひとりの市民として、同じ生

活者として声をかけ、一人の個人として話すとき、路上の人にも変化が現れる。後藤さんはその後、多様な生活者の集まれる場を作り、地域住民がホームレス状態の人と出会う場を作った。街の中に、ホームレス状態の人が語れる場を作った。逆

に、当事者を苦しめてしまつこともある。かつて後藤さんが「支援」を勧めた方も、生活保護を受けたいと言って援助を拒み続けたまま亡くなつてしまつた。声をかけられる度に、自己責任ということが強く響いていたのではないかと、後藤さんは振り返る。誰にだってプライドがある。仕事さえ貰えればここから、抜け出して行けるんだという自尊心を失つては生きていけない。しかしわたしたちが、ひとりの市民として、同じ生

活者として声をかけ、一人の個人として話すとき、路上の人にも変化が現れる。後藤さんはその後、多様な生活者の集まれる場を作り、地域住民がホームレス状態の人と出会う場を作った。街の中に、ホームレス状態の人が語れる場を作った。逆

に、当事者を苦しめてしまつこともある。かつて後藤さんが「支援」を勧めた方も、生活保護を受けたいと言って援助を拒み続けたまま亡くなつてしまつた。声をかけられる度に、自己責任ということが強く響いていたのではないかと、後藤さんは振り返る。誰にだってプライドがある。仕事さえ貰えればここから、抜け出して行けるんだという自尊心を失つては生きていけない。しかしわたしたちが、ひとりの市民として、同じ生

伊豆大島台風災害 復興支援

言葉の違いを越え ボランティア

10月の台風26号で被災した伊豆大島の復興支援のため東京YMCAは、「東京都災害ボランティアセンター」に加盟する他のNPOなどと協力し、11月から12月中旬まで職員や会員を現地に派遣しました。12月18日から3泊4日、泥かき作業など清掃作業を行った、会員のルゾンカ・ポールさんの感想をご紹介します。

私は伊豆大島の復興支援のため東京YMCAは、「東京都災害ボランティアセンター」に加盟する他のNPOなどと協力し、11月から12月中旬まで職員や会員を現地に派遣しました。12月18日から3泊4日、泥かき作業など清掃作業を行った、会員のルゾンカ・ポールさんの感想をご紹介します。

私は伊豆大島の復興支援のため東京YMCAは、「東京都災害ボランティアセンター」に加盟する他のNPOなどと協力し、11月から12月中旬まで職員や会員を現地に派遣しました。12月18日から3泊4日、泥かき作業など清掃作業を行った、会員のルゾンカ・ポールさんの感想をご紹介します。

私は伊豆大島の復興支援のため東京YMCAは、「東京都災害ボランティアセンター」に加盟する他のNPOなどと協力し、11月から12月中旬まで職員や会員を現地に派遣しました。12月18日から3泊4日、泥かき作業など清掃作業を行った、会員のルゾンカ・ポールさんの感想をご紹介します。

私は伊豆大島の復興支援のため東京YMCAは、「東京都災害ボランティアセンター」に加盟する他のNPOなどと協力し、11月から12月中旬まで職員や会員を現地に派遣しました。12月18日から3泊4日、泥かき作業など清掃作業を行った、会員のルゾンカ・ポールさんの感想をご紹介します。

私は伊豆大島の復興支援のため東京YMCAは、「東京都災害ボランティアセンター」に加盟する他のNPOなどと協力し、11月から12月中旬まで職員や会員を現地に派遣しました。12月18日から3泊4日、泥かき作業など清掃作業を行った、会員のルゾンカ・ポールさんの感想をご紹介します。



↑写真中央がルゾンカさん。右は同じくボランティア作業をした会員の飯野毅与志さん。左は職員の村上祐介。

石巻通信

YMCA石巻支援センター 伊藤 剛士



2013年12月5日は東日本大震災から1000日の節目でした。この日、復興のシンボルである「頑張りろ石巻」の看板前には、市内の犠牲者数である3266個の灯籠が並べられ、追悼の灯りがともされました。

この看板のある南浜町は、以前は約2000世帯6000人が暮らす住宅地でしたが、最高7メートルの津波が直撃し、ほぼ全戸が全壊、現在は地区全体が集団移転の対象になっています。

11月、石巻市民の集団移転団地・復興公営住宅の事前登録の速報が発表されました。市が整備を

計画しているのは3250戸ですが、すでに4017世帯が入居を希望しており、十分とはいえない状況です。

また、復興公営住宅への入居時期は2016年頃が多く、入居が決まった方でもあと2年は仮設住宅で暮らさねばなりません。長期化する避難生活の中での被災者のストレスケアも課題となっています。

仮設住宅内の集会所には、最近、子どもの出入りを禁止する貼り紙が目立っています。今後YMCAの強みを生かした支援活動を継続していきたいと考えています。

専門性を生かした遊びプログラムや、保護者への相談・ケア活動が大変好評です。今後もYMCAの強みを生かした支援活動を継続していきたいと考えています。

アジア太平洋YMCA同盟 主事研修



10カ国16人が約1ヶ月間、共に研修した。前列右から3人目が小畑さん。香港郊外のユースビレッジで。

10カ国16人が研修

世界のつながり深める

国際ホテル専門学校 小畑 貴裕

アジア太平洋YMCA同盟（略称「APAY」）が主催する「第31回アドバンス・スタディーズ・プログラム（主事研修）」が11月3日から30日まで28日間、香港郊外にあるウクワイシャ・ユースビレッジで開催されました。今年のアフリカ、ヨーロッパからの参加者も加わり10カ国16人が参加しました（ガンビア、ルーマニア、インド、スリランカ、バングラデシュ、フィリピン、フィジー、中国、台湾、日本）。約1ヵ月間、16人で寝食を共にし、YMCAのミッションや現代社会における役割、ユースの育成や組織運営など、さまざまなトピックについて学ぶ貴重な機会を得られました。

研修の冒頭でAPAY総主事の山田公平氏は「多くの知識・見識を自分のモノにすることも大切な研修の目的ですが、一番の期待はここにいる16人の個々の関係性を深くすることにより、国と国、組織と組織のネットワークが強靱になることです」と語られました。ファンドレイズ（寄付金の募集）に関する講義の中でも、人と人との関係の強化には「堅苦しくなく（Casual）→つながる（Connected）→信じてゆだねる（Committed）」という3つの“C”が重要ということ。偏見をもたずに、自分の壁を取り除き、素の自分をさらけだし、相手のことを理解して強い絆を作ることが重要とありました。

私は20年間、東京YMCAの学校事業に特化して仕事に勤しんできました。YMCAという世界に連なる組織に居ながら世界に目を向けて仕事をする機会が少なく、“目からウロコが落ちる”ことがあまりにも多くありました。そして日本は本当に恵まれているのだと痛感しました。

“What is your heart in the YMCA?”（君の心にあるYMCAは何ですか）

“Why do you love the YMCA?”（なぜYMCAを好きなのか）

“Why do you work in the YMCA?”（なぜYMCAで働くのか）

“Why do you believe the YMCA?”（なぜYMCAを信じるのか）

講義中に投げかけられたこの質問に、誇りを持って答えられること。それを自身の実体験を通し、目の前にいる人に強いメッセージとして伝えられるストーリーを持つこと。自分の仕事と世界と繋がっていることに誇りを持つこと。シンプルなのですが、とても考えさせられるメッセージでした。

この学びをいかにスタッフにシェアしていくかが今後の自身の課題になりそうです。

シリーズ 資料室の窓から(84)

関東大震災後、掘り出した礎石

齊藤 實



新しい資料である。関東大震災で倒壊炎上した東京YMCA初代会館の礎石を、灰燼（かいじん）の中から掘り出し得て感謝する集いの写真で

関東大震災後に掘り出した会館の礎石と、総主事・職員たち。今は資料室に保管されている。

1923年9月1日昼に起きた大地震は、東京YMCAにとっては、創立以来熱心に続けた大講堂での集会による「啓蒙」活動を、会員の自発的「倶楽部」活動に移行する転機となった。当時の状況を主事熊谷仁三郎は『東京YMCA五十年略史』に書いた。

「神田美土代町本館跡にバラックを急造し青年会事業を開始したのは翌（大正）13（1924）年春であった」と。しかし、当時の動きを伝える「理事会日誌」は、和紙を綴じた記録簿に墨書で次のように記している。1924年1月22日、「建築関係報告。麻布寄宿舎・英語学校・バラック等修繕の件。簡易食堂は当分の間閉鎖」と。1924年4月7日の理事会は次のように諸報告を記録している。「四、会館取壊シノ上焼残リ金屬ヲ売却スルコト。且ツ礎石取除キノ際ハ理事ノ立会ヲナ

1923年9月1日昼に起きた大地震は、東京YMCAにとっては、創立以来熱心に続けた大講堂での集会による「啓蒙」活動を、会員の自発的「倶楽部」活動に移行する転機となった。当時の状況を主事熊谷仁三郎は『東京YMCA五十年略史』に書いた。

「神田美土代町本館跡にバラックを急造し青年会事業を開始したのは翌（大正）13（1924）年春であった」と。しかし、当時の動きを伝える「理事会日誌」は、和紙を綴じた記録簿に墨書で次のように記している。1924年1月22日、「建築関係報告。麻布寄宿舎・英語学校・バラック等修繕の件。簡易食堂は当分の間閉鎖」と。1924年4月7日の理事会は次のように諸報告を記録している。「四、会館取壊シノ上焼残リ金屬ヲ売却スルコト。且ツ礎石取除キノ際ハ理事ノ立会ヲナ

